

13) 子どもはこれまでどのような虐待(大げな怪我を負う経験、目の死、頭風の頓倒、ペットの死など)をしたことがありますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. あり 2. ない 3. 不明
ある場合... どのような虐待体験ですか？

14) 子どもは上記のような虐待や虐待体験以外で、トラウマとなるような怖い経験、悲しい経験(交通事故に遭う、災害に遭う、家庭内暴力を体験する、犯罪被害に巻き込まれる等)をしたことがありますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. あり 2. ない 3. 不明
ある場合... どのようなトラウマ体験ですか？

15) 以下に挙げる状態のなかで、入所時に子どもに見られたものはありますか？(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

1. からだのあちこちらに傷やあざがある
2. 皮膚の損傷が癒えていない
3. 褥瘡の痕跡がある
4. 衣服がいつも汚れている
5. 皮膚に腫れた部分がある

前次の項目は該当するお子さんのみが答えてください
16) 虐待被害または発達障害の疑いを感じていますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. 知っている 2. 知らない
「知っている」場合... 被害者と被害者をご記入ください
「知らない」場合... 知照の状態を推測してください(いずれかに○をつけて下さい)

3. 家庭の状態について

(1) 入所時の同居家族について

① 入所時点で子どもはどの家族関係者と同居していましたか？(あてはまるものすべてに○をつけて下さい)

1. 養父 2. 養母 3. 養(継)父 4. 養(継)母 5. 養父
6. 養母 7. 兄・姉() 8. 弟・妹() 9. 伯(叔)父 10. 伯(叔)母
11. その他() 12. 不明 13. いない

② 同居家族の中で主な養育者は誰ですか？またその人の年齢を記入してください。

主な養育者: ()歳

③ 入所時の家族の経済状況は？

1. 生活保護受給あり 2. 受給なし 3. 不明

(2) 養親について

① 入所時の養親の婚姻状態はどのような状況ですか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 結婚 2. 離婚 3. 養母 4. 養父 5. 不明

(3) 養育について

① 養母が子どもを産んだのはいつですか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 14歳以下 2. 15~17歳 3. 18~19歳 4. 20代 5. 30代
6. 40代以上 7. 不明

② 養母と子どもの親・親類の状況は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 養父と同居 2. 養父と同居 3. 死亡

別居の場合、その理由は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 虐待による別居 2. 入院中 3. 行方不明 4. 養親中
5. その他() 6. 不明

③ 養母の学歴は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 中学校 2. 高校卒 3. 大学卒 4. 専門学校卒 5. その他() 6. 不明

④ 養母が子どものこころ虐待されていたことがあると聞いていますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. あり 2. ない 3. 不明

ある場合... どのような虐待ですか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 身体的虐待 2. 性的虐待 3. 心理的虐待
4. ネグレクト 5. DVの被害 6. 不明

⑤ 養母は虐待以外でトラウマとなるような怖い経験、悲しい経験をしたことがあると聞いていますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. あり 2. ない 3. 不明

ある場合... どのようなトラウマ体験ですか？

⑥ 養母に何らかの疾患はありますか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. あり 2. なし 3. 不明

ある場合、どのような疾患ですか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 身体疾患 2. 精神疾患 3. アルコール依存
4. 精神障害(病名が分かれば具体的に記入してください) 5. 不明

⑦ 養母に愛別居はありますか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. あり 2. なし 3. 不明

(4) 養父について

① 子どもが生まれたときの養父の年代は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 14歳以下 2. 15~17歳 3. 18~19歳 4. 20代 5. 30代
6. 40代以上 7. 不明

② 養父と子どもの親・親類の状況は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 養父と同居 2. 養父と同居 3. 死亡

別居の場合、その理由は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 虐待による別居 2. 入院中 3. 行方不明 4. 養親中
5. その他() 6. 不明

③ 養父の学歴は？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 中学校 2. 高校卒 3. 大学卒 4. 専門学校卒 5. その他() 6. 不明

④ 養父が子どものこころ虐待されていたことがあると聞いていますか？(どちらかに○をつけて下さい)

1. あり 2. ない 3. 不明

ある場合... どのような虐待ですか？(いずれかに○をつけて下さい)

1. 身体的虐待 2. 性的虐待 3. 心理的虐待
4. ネグレクト 5. DVの被害 6. 不明

5. 貴父は慰謝料以外でトラウマとなるような痛い経験、苦しい経験をしたことがあると聞いていますか？ (どちらかに○をつけて下さい)

あり ない 不明
ある場合、どのようなトラウマ体験ですか？

6. 貴父に何らかの病歴はありますか？ (いずれかに○をつけて下さい)

あり なし 不明
ある場合、どのような病歴ですか？ (いずれかに○をつけて下さい)
1. 身体疾患 2. 薬物依存 3. アルコール依存
4. 精神障害 (病名が分かれば具体的に記入してください) 不明

7. 貴父に差別歴はありますか？ (いずれかに○をつけて下さい)

あり なし 不明

(3) きょうだいについて

8. きょうだいの中で虐待されていたことがあると聞いていますか？ (どちらかに○をつけて下さい)

あり なし 不明
ある場合、その内容は何ですか？ (いずれかに○をつけて下さい)
1. 身体的虐待 2. 性的虐待 3. 心理的虐待
4. ネグレクト 5. DVの目撃 6. 不明

9. 借金・外泊などの事象との接触の状況について

(1) 接触はありますか？ (どちらかに○をつけて下さい)

あり なし
ある場合、その頻度はどのぐらいですか？ (いずれかに○をつけて下さい)

1. 週に1回程度 2. 月に2回程度 3. 月に1回程度 4. 長期休職中のみ

(2) 接触はありますか？ (どちらかに○をつけて下さい)

あり なし
ある場合、その頻度はどのぐらいですか？ (いずれかに○をつけて下さい)

1. 週に1回程度 2. 月に2回程度 3. 月に1回程度 4. 長期休職中のみ

10. 貴父以外の重要な保護者(祖父・祖母など)について

(1) そうした保護者の存在はありますか？ (どちらかに○をつけて下さい)

あり なし 不明

ある場合、その頻度はありますか？ (いずれかに○をつけて下さい)

あり なし

ある場合、その頻度はどのぐらいですか？ (いずれかに○をつけて下さい)

1. 週に1回程度 2. 月に2回程度 3. 月に1回程度 4. 長期休職中のみ

(2) 接触はありますか？ (いずれかに○をつけて下さい)

あり なし

ある場合、その頻度はどのぐらいですか？ (いずれかに○をつけて下さい)

1. 週に1回程度 2. 月に2回程度 3. 月に1回程度 4. 長期休職中のみ

1. ト라우マに関するチェックリスト

1. お子さんに以下のことがあったことを聞いていますか？

	明らかに あった	あったと 推定される	不明	ない
1 殴られる	1	2	3	4
2 蹴られる	1	2	3	4
3 物を投げつけられる	1	2	3	4
4 物で叩かれる	1	2	3	4
5 タバコの火を押し付けられる	1	2	3	4
6 その他の虐待を負わされる	1	2	3	4
7 湯煎に沈められる	1	2	3	4
8 その他の暴力行為を受けた(具体的に:)	1	2	3	4
9 突然大声で怒鳴られるなど、感覚を通じての恐怖の体験があった	1	2	3	4
10 ことが事故で病院にかかった(熱傷、転落、など)	1	2	3	4
※ 10 ことが事故で病院にかかった回数			1. 1回 2. 2~3回 3. 4回以上 4. 不明	
11 子どものとって必要な日常的なケアを与えられなかった(例: オムツをはずさない、ミルクを与えない、食糧を与えない、身体を清潔にしない等)	1	2	3	4
12 必要なのに病院に連れて行かない、あるいは病院につれて行かないということがあった	1	2	3	4
13 子どもにとって必要な愛情を与えられなかった(例: 話かけない、笑いかけない、抱かない、泣いても慰まない等)	1	2	3	4
14 月経音の下安定さなどで、ケアが一定しなかった(可愛がる時もあれば全く可愛がらないときもあるなど、子どもに対する態度が一定しない様子)	1	2	3	4
15 年齢下相応な性的刺激が与えられた(例: 大人の性器をさわらせる等)	1	2	3	4

2. お子さんに以下のような状況が見られますか？ 年齢的にまだできないと思われる事柄については「ない」とお答えください。

	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に 不可解
1 怖かった体験に関連した遊びをする	1	2	3	4	5
2 似たような内容の遊びを繰り返す	1	2	3	4	5
3 ある特定の状況(おそろく恐怖体験と関連した刺激)で、急に激しく泣くなど、表情や態度が異化することがある(8ヶ月以降の頃らかな人見知りも含く)	1	2	3	4	5
4 ある特定の状況で、こちらとかかわらなくなってボーとしていることがある	1	2	3	4	5
5 ある特定の状況で、汗をかいたり震えたりといった生理的な反応をする	1	2	3	4	5
6 ある特定の状況を常に避けようとする	1	2	3	4	5
7 他人との関わりが希薄である	1	2	3	4	5

	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に 不可解
8 他の子どもと比較して表情が少ない	1	2	3	4	5
9 些細なことでもびくびくして不安そうにする	1	2	3	4	5
11 いらいらしている	1	2	3	4	5
12 急に気分が変わることがある	1	2	3	4	5
13 急に泣き出して止まらなくなる	1	2	3	4	5
14 激しいかんしゃくがある	1	2	3	4	5
15 予期しない物音でパニックになることがある	1	2	3	4	5
16 後ろから誰かが近づくとパニックになることがある	1	2	3	4	5
17 大人がかかわろうとして体を近づけたり手を乗せたりすると、びくっとすることがある	1	2	3	4	5
18 身体接触を避ける	1	2	3	4	5
19 常に警戒している	1	2	3	4	5
20 引っ込み思案で孫わろうとしない	1	2	3	4	5
21 新しい場所や新しい人に対して過度に警戒する	1	2	3	4	5
22 扉を開くのが怖い	1	2	3	4	5
23 扉を叩く以上に怖がる特定の人や物や場面がある	1	2	3	4	5
24 他人の子と遊ぼうとしない	1	2	3	4	5
25 常にハイテンションである	1	2	3	4	5
26 動きが止まってしまうことがある	1	2	3	4	5
27 親が「出来た」と言うことでも出来なくなっていることがある(例: ①遊具が出ていたのに踏まなくなった ②ひとりだけで寝ていたのに今は寝れなくなった等)	1	2	3	4	5
28 発達が進んでいるように見える(例: ①ことが出ていてもなかなか聞かない ②つかまり立ちをするが、なかなか一人で歩かない等)	1	2	3	4	5
29 夜泣きが激しい	1	2	3	4	5
30 怖い夢を見ているようである	1	2	3	4	5
31 寝起きて大騒ぎをする	1	2	3	4	5
32 寝つきが悪い	1	2	3	4	5
33 周囲に対して攻撃的である	1	2	3	4	5
34 感情の起伏が激しい	1	2	3	4	5
35 ひとりで遊んでいることが多い	1	2	3	4	5
36 トイレにひとりでいけない	1	2	3	4	5

Ⅲ. 養育に関するチェックリスト

お子さんと施設職員の方とのかかわりの様子についてお答えください。

1 お子さんにとって施設職員の存在は他の大人より特別な存在と なっていますか？	1. いない	2. いる
2 (1)「1. いない」の場合、他の施設内職員の中でそのような特別な 存在となっている人はいますか？	1. いない	2. いる
(2)「2. いる」の場合、それは誰ですか？	()	

以上の設問において、お子さんにとって特別な存在である大人(施設職員やその他の職員)のことを「特別な大人」と称します。もしそのような「特別な大人」がいない場合には、施設職員を対象としてお答えください。

お子さんの普段の行動から以下のような様子が見られますか？

	よくある	ある	たまに ある	ない	精神的に 不安定
1 お話が面白い	1	2	3	4	5
2 嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、「特別な大 人」に近づいて慰めてもらおうとする	1	2	3	4	5
3 嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、「特別な大 人」に近づいて慰めを求めようとせず、固まってしまう	1	2	3	4	5
4 自分ができないことや固まったことがあったとき、「特別な大人」に助 けてもらおうとしない	1	2	3	4	5
5 強がることが多い	1	2	3	4	5
6 威しもしなつかない	1	2	3	4	5
7 大人と同わろうとしない	1	2	3	4	5
8 「特別な大人」に対していい子ぶる、外見がいい	1	2	3	4	5
9 ひとりで遊んでいることが多い	1	2	3	4	5
10 ほかに子をたたいたり、蹴ったりする	1	2	3	4	5
11 人のものをとったりする	1	2	3	4	5
12 威ないことを平気でする	1	2	3	4	5
13 友達がうるい	1	2	3	4	5
14 生き生きとしている	1	2	3	4	5
15 「特別な大人」の言うことを真直に聞く	1	2	3	4	5
16 友達と仲良く遊ぶ	1	2	3	4	5
17 気分や感情が急に変わる (例：そばにいていてと認ったらすぐに笑う)	1	2	3	4	5
18 気分がよくなる (例：落ち着いているときとイライラしているときが頻りに変わる)	1	2	3	4	5

	よくある	ある	たまに ある	ない	精神的に 不安定
19 怒められてもなかなか罵倒しや返事しない	1	2	3	4	5
20 すぐには「特別な大人」に帰る	1	2	3	4	5
21 依存心が強い	1	2	3	4	5
22 大人に親に入られようと可愛い子ぶる	1	2	3	4	5
23 誰にでも話べたしてくる	1	2	3	4	5
24 ちよつとしたことで誰かによって自由に遊ばない	1	2	3	4	5
25 「特別な大人」に抱かれていても、遠くをボーッと見ている。	1	2	3	4	5
26 「特別な大人」に抱かれているときに、体を固くしている。	1	2	3	4	5
27 「特別な大人」に近づいたり、逃げたり、怒ったりを同時に行う。	1	2	3	4	5
28 「特別な大人」に笑いかけるが、おびえたようなひきつった笑いで ある。	1	2	3	4	5
29 理由なく突然泣き出す。	1	2	3	4	5
30 意味のない動作を何度も繰り返す(例：顔を前後に振る、耳を引 き出す、体を揺らす、など)	1	2	3	4	5
31 突然固まって、ぼーっとした表情をする。	1	2	3	4	5
32 ぼーっとした様子で目的なく動きまわっている。	1	2	3	4	5
33 「特別な大人」を擁護して、逃げたり隠れようとしたりする。	1	2	3	4	5
34 警戒して、「特別な大人」の手の届く範囲には近づこうとしない。	1	2	3	4	5
35 「特別な大人」が遠くに行くまで監視した様子である。	1	2	3	4	5
36 嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに「特別な大人」 に近づこうとしても、それを受け入れようとしていない	1	2	3	4	5
37 嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、固まってし まったり、繰り返してしまふ	1	2	3	4	5
38 「特別な大人」を求めてくるが、同わろうとせずと逃げてしまう	1	2	3	4	5
39 「特別な大人」を求めていながら、攻撃を興ける	1	2	3	4	5
40 「特別な大人」を困らせるような行動を多くとる	1	2	3	4	5
41 常に「特別な大人」の顔色を伺っている	1	2	3	4	5
42 過度に警戒している(例：キョロキョロ顔や心配している等)	1	2	3	4	5
43 常に監視している	1	2	3	4	5

	よくある	ある	たまにある	ない	平均的に 下り線
44 いつものいらしている	1	2	3	4	5
45 遊びに集中できない	1	2	3	4	5
46 悲しそうにしている	1	2	3	4	5
47 笑顔が少ない	1	2	3	4	5
48 年齢不相応に動きが少ない	1	2	3	4	5
49 挫りついた目あるいはうつろな目をしている	1	2	3	4	5
50 目を合わせて笑いあうことが少ない	1	2	3	4	5
51 自分から甘えてくることが少ない	1	2	3	4	5
52 甘え方が下手である	1	2	3	4	5
53 抱かれ方やおんぶのされ方が下手である	1	2	3	4	5
54 身体接触を避けようとする	1	2	3	4	5
55 知らない場所でも、目的なくふらふらして、大人がいなくても動揺しない	1	2	3	4	5
56 次々に別の大人を求める	1	2	3	4	5
57 接触を合わせることが少ない	1	2	3	4	5
58 大人がいても自分で危険な行動(車道へ飛び出す、高い所から飛び降りる等)をとる	1	2	3	4	5
59 「特別な大人」の言うことをロボットのように聞く	1	2	3	4	5
60 ちょっとしたことでもびくつとする	1	2	3	4	5
61 ちょっとしたことでも固まってしまう	1	2	3	4	5
62 「特別な大人」を求めてくるがすぐに飽く	1	2	3	4	5
63 「特別な大人」を求めていながら、ちょっとした事で離れてしまう	1	2	3	4	5
64 ひとりの大人と集中して遊べない	1	2	3	4	5
65 特定の大人との離れかかわりができない	1	2	3	4	5

Ⅲ. 感覚・行動・調節に関するチェックリスト

1. お子さんには次のようなことがありますか？	よくある	ある	たまにある	ない
1 寝る時間や起きる時間が一定しない	1	2	3	4
2 寝つきが悪い	1	2	3	4
3 寝るときや起きた時にぐずる	1	2	3	4
4 起床が一定しない	1	2	3	4
5 夜中に目覚める時がある	1	2	3	4
6 ミルクや食事の量や回数にムラがある	1	2	3	4
7 ミルクや食事を飲まざる時がある	1	2	3	4
8 それほど暑くないのに激しく汗をかくことがある	1	2	3	4
9 活動が激しい時と悪い(おとなしい)時があり、一定しない	1	2	3	4
10 興奮するととめることが出来ない	1	2	3	4
11 寒に入らないと通常以上に激しく泣く	1	2	3	4
12 泣き出すとなかなか止まらない	1	2	3	4
13 ぐずることが多い	1	2	3	4
14 かんしゃくが多い	1	2	3	4
15 かんしゃくを起すと周囲が見えなくなる	1	2	3	4
16 床や壁に自分の頭を打ち付けることがある	1	2	3	4
17 血が出るまで自分を引っかくことがある	1	2	3	4
18 自分の体の一部を激しくたたくことがある	1	2	3	4
19 かつとなると暴力的になる	1	2	3	4
20 一つの行動から別の行動への切り替えがうまくいかない(遊びをやめて食事をするなど)	1	2	3	4
21 常に動いていて、なかなかとめることが出来ない	1	2	3	4
22 物にいじりをしている(していた)	1	2	3	4
23 ある特定の音に過敏な反応をする	1	2	3	4
24 小さな音にも過敏である	1	2	3	4

	よくある	ある	たまにある	ない
25 大きな声で話せる	1	2	3	4
26 大きな声で話す傾向がある	1	2	3	4
27 テレビなどを大きな声で聞く傾向がある	1	2	3	4
28 新しい服を壊れる	1	2	3	4
29 特定のものが好きでない	1	2	3	4
30 手を洗わないでもらうことを嫌がる	1	2	3	4
31 水を切ってもらったり、磨きしてもらったりすることを嫌悪に嫌がる	1	2	3	4
32 口の周りを拭いてもらったり、磨きをしてもらうことを嫌悪に嫌がる	1	2	3	4
33 帽子をかぶりたがらない	1	2	3	4
34 靴下を履きたがる。あるいは逆に、履くことを嫌がる	1	2	3	4
35 靴まくりや、ズボンの裾を捲り上げることが嫌がる	1	2	3	4
36 着ているものがぬれると嫌悪に嫌がる	1	2	3	4
37 月おのに髪梳を替たがったり、髪おのに上目をすることを嫌がる	1	2	3	4
38 特定の食感のものを食べたがらない(例:固いもの等)	1	2	3	4
39 味の非常に濃いものを好む	1	2	3	4
40 人の髪の色や耳たぶを膚に焼きたがる	1	2	3	4
41 法則などを嫌悪に嫌がる	1	2	3	4
42 強い痛みは興奮である	1	2	3	4
43 脱びやすい	1	2	3	4
44 不安定な場所を好む(例:脱びやすい場所、落ちそうな場所等)	1	2	3	4
45 ボール投げが単純反応に出来ない	1	2	3	4
46 高いところを嫌がる	1	2	3	4
47 危険を察みず、高いところの上ったり、脱び降りたりする。	1	2	3	4
48 すぐには強い泣き声になる	1	2	3	4
49 他人をもののように扱う	1	2	3	4
50 その場にあったことと実情が一致していない	1	2	3	4

	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
51 友だちにやさしい	1	2	3	4	5
52 ルールが守れない	1	2	3	4	5
53 よくけんかをする	1	2	3	4	5
54 ものを盗む	1	2	3	4	5
55 注意されると下を向いて固まる	1	2	3	4	5
56 友だちに暴力を振るう	1	2	3	4	5
57 人のものをとって自分のテリトリーにためておく	1	2	3	4	5
58 非感性がある	1	2	3	4	5
59 大人に暴力を振るう	1	2	3	4	5
60 小さい子に暴力を振るう	1	2	3	4	5
61 大人の言うことにことごとく反抗する	1	2	3	4	5
62 他の子をいじめる	1	2	3	4	5
63 力の強い子に支配されやすい	1	2	3	4	5
64 想像力が豊かである	1	2	3	4	5
65 力の強い人と弱い人に対する態度が全く違う	1	2	3	4	5
66 年齢下相応に性的な言葉を発する	1	2	3	4	5
67 オナニーをする	1	2	3	4	5
68 性器いじりが多い	1	2	3	4	5
69 汚い言葉を多用する	1	2	3	4	5
70 ものの扱いが乱雑である	1	2	3	4	5
71 非常に衝動的な行動をする	1	2	3	4	5
72 ストーリーのある遊びができる	1	2	3	4	5
73 集中力がない	1	2	3	4	5

	よくある	ある	たまにある	ない	年齢的に不可能
74 順番をまてない	1	2	3	4	5
75 食事中に立ち歩く	1	2	3	4	5
76 常に動いている	1	2	3	4	5
77 遊びが次々変わる	1	2	3	4	5
78 友達に簡単に手が出る	1	2	3	4	5
79 白昼夢の状態がみられる	1	2	3	4	5
80 ままごとを楽しくできる	1	2	3	4	5

IV. 解離症状チェックリスト(CDC) ※4歳以上

	全く その通り	時々 そうだ	全くあて はまらない
1 心に強い痛みをもたらすような経験や苦痛な経験—それが周知の出発点である のはにもかかわらず—を、子どもが覚えていなかったり、そんなことはなかったと書 く	1	2	3
2 子どもが、時として、「ぼうつ」としたり、意識がうつろいになっているように見える。もし くればしばしば「心ここにあらず」の状態になる。担任の保育士が、この子は学校 でよく「白昼夢」を見ているようだと言明することがある	1	2	3
3 急に人が変わったようになる。たとえば女の子っぽかったかと思えば急に男っ ぽくなったり、あるいは、健病だったのが攻撃的になったりする	1	2	3
4 知っているはずのことについて忘れてしまったり、混乱したりすることがしょつ ちにある。たとえば、友人や保育士や、そのほかの重要な人の名前を忘れて しまったり、持ち物をなくしたり、すでに進子になってしまったりなど	1	3	3
5 時間の感覚に乏しい。時間の経過がわからなくなったり、時には午後なのに 午前中だと思ってしまうことがある。また、季節が何回も変わったり、ある 川が干涸びたことなどがいつか知らず知らずのうちにわかってしまう	1	2	3
6 子どもの技術や知識、食べ物の好み、運動能力などが、日によってあるいは時 間によってかなり変動する。たとえば、運動が激しかったり、読書が好きで、道具の使 い方や芸術の能力などが、日によって学んだ知識の記憶が変化したりする	1	2	3
7 たとえば12歳の子どもが赤ちゃん言葉でしゃべり始めたり、信じがたげな 4歳児のような動きを繰り返したりといった場合には、年齢にふさわしい行動からの急な 退却が見られる	1	2	3
8 社会を通して学ぶことに困難がある。たとえば説明したり、しつげたり、あるいは 罰を食えども、子どもの行動が変化しないなど	1	2	3
9 子どもがやったという事実が明らかでも、自分のおかした過ちをかたくな に認めなかったり、嘘をつき続ける	1	2	3
10 自分のことを話しているときに、自分を三人称(彼とか彼女といった具合に)で 自分のこと、または自分の身に起こったことを呼んでほしいと言いつつ、場合によって は、自分のこと、または自分の身に起こったことを、別の子に起こったことだと書い ていくこともある	1	2	3
11 頭痛や胃の下伏など、身体的な下痢の訴えが次々に変わる。たとえばあるとき は頭痛を訴えていたかと思えば、次の瞬間にはそのことを全く忘れてしまったか のように見えるなど	1	2	3
12 性的に非常に早熟であり、他の子や成人と、年齢にふさわしくないような性的な 行動をしようとする	1	2	3

	全く その通り	時々 そうだ	全くあて はまらない
13 説明のつかないようなケガをしたり、故意に自分の身体を傷つけるような行動が みられる	1	2	3
14 自分自身に話しかけてくる声が聞こえるという、その声は親しげであることもあ れば、怒っていることもある。また、その声の持ち主は「空想上の友達」であつた り、あるいは両親や友達、学校の先生であつたりする	1	2	3
15 はっきりとしたイメージの空想上の友達—1人もしくは複数—がいる。子どもが、 自分のやったことについての責任は空想上の友達にあると主張することもある	1	2	3
16 怒りを強く爆発させてかんしゃくを起こす。かんしゃくの原因がはっきりしない こともしばしばで、かんしゃくを起こしているときには、そのこの程度の様子から は考えられないような強い力を示す	1	2	3
17 夢遊病の状態を示すことがよくある	1	2	3
18 夜間に通常ではない体験が生じる。たとえば「お化け」を見たといったり、自分 自身で説明できないようなこと(たとえばおもちゃが壊れていた、説明のつか ない傷を負ったりなど)が起きる	1	2	3
19 独り言が多い。違った声で自分自身に話しかけたり、言い争ったりする	1	2	3
20 子どもに、2人以上の明らかに異なった人格が備わっており、その人格が交代 で子どもの行動をコントロールする	1	2	3

資料2-1 乳幼児チェックリスト最終採用項目 (6~23ヶ月用)

I . PTSD	
1	驚かれる
2	驚かれる
3	物を投げつけられる
4	物で叩かれる
5	クベコの大を押し付けられる
6	その他の恐怖を興わせられる
7	過酷に叱められる
8	その他の暴力行為を受けた
9	突然大声で怒鳴られるなど、感覚を通じての恐怖の体験があった
10	こどしが事故で病院にかかった
11	こどもにとって必要な日常的なケアを与えられなかった
12	必要なのに病院に連れて行かない、あるいは虐待につれて行かないということがあった
13	こどもにとって必要な愛情を与えられなかった
14	月齢者の不安定さなどで、ケアが一貫しなかった
15	年齢下相応な性的刺激が加えられた
16	ある特定の状況で、急に激しく泣くなど、月齢や環境が変化することがある
17	些細なことでびくびくして不安そうにする
18	急に泣き出して止まらなくなる
19	普通以上に怖がる特定の人や物や場面がある
20	夜泣きが激しい
21	感情の起伏が激しい
22	ひとりで遊んでいることが多い

II . 愛着	
1	月齢が合わない
2	ヤムと関わらなうとしない
3	「特別なヤム」に押しつけていきなり、怒るかいけ
4	ムのものをとった事をする
5	抱き寄せとしない
6	見守る態度が不足
7	抱められてもなかなか寝てくれない
8	なやましてしまったことで怖がって寝るに暴ばない
9	「特別なヤム」に抱かれています。早くをボーンと見ている
10	突然泣き出して、ぼーっとした状態をする
11	怖なことがあったとき、怖い時、怖れを感じたときは、抱き寄ってしまったか、泣き止んでしまふ
12	いつしかおちちしている
13	抱きは暴暴できない
14	抱き寄せにしている
15	抱き寄せない
16	ヤムがいた日あるいはほろつろな目をしている
17	ヤムがいて自分でも抱き寄せたりする

III . 悪化・行動・固執	
1	泣くことが多い
2	悪化は自分の用を行わ付けることがある
3	ヤムに悪化は強き事になる

資料2-2、乳幼児チェックリスト最終採用項目（24ヶ月以上用）

I. PTSD	
1	殴られる
2	罵られる
3	物を投げつけられる
4	脅で叩かれる
5	ケチの火を押し付けられる
6	その他の悪戯を食わせられる
7	強制に成められる
8	その他の暴力行為を受けた
9	突然大声で怒鳴られるなど、感覚を通じての虐待の経験があった
10	こじこじが事故で病院にかかった
11	こじこじにとって必要な日常的なケアを与えられなかった
12	必要なのに病院に連れて行かない、あるいは解部につれて行かないということがあった
13	こじこじにとって必要な愛情を与えられなかった
14	育児者の不安定さなどで、ケアが一途しなかった
15	早期に物感な性的刺激が加えられた
16	ある特定の状況で、急に泣き出すなど、表情や態度が変化することがある
17	ある特定の状況で、こちらとかわからなくなってボーとしていたことがある
18	他のこじこじに比べて表情が少なく
19	急に泣き出して止まらなくなる
20	寝が「出来ていた」と言うことでも出来なくなっていることがある
21	寝つきが悪い
22	睡眠に対して攻撃的である

II. 愛着

1	表情が悲しい
2	嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、「特別な大人」に近づいて慰めを求めようとせず、固まってしまう
3	「特別な大人」に対していい言葉を、笑顔がいい
4	ほかの子をたたいたり、蹴ったりする
5	人のものをとったりする
6	嫌なことを平気でする
7	表情が明るい
8	生き生きとしている
9	「特別な大人」の言うことを素直に聞く
10	友達と仲良く遊ぶ
11	気分や感情が急に変わる
12	自分のムラがある
13	慰められてもなかなか気持ちが落ちる
14	すぐに「特別な大人」に明る
15	好奇心が強い
16	大人に気軽に人られようと可愛く子ぶる
17	急にでもべたべたしてくる
18	ちょっとしたことで怖がって自由に遊ばない
19	「特別な大人」に抱かれていても、遠くをボーッと見ている
20	突然寝あって、ぼーとした表情をする
21	嫌なことがあったとき、怖い時、痛みを感じたときに、固まってしまうたり、凍り付いてしまう
22	「特別な大人」を困らせるような行動を多くとる

- 23 適度に警戒している
- 24 常に監視している
- 25 いつもいらいらしている
- 26 遊びに集中できない
- 27 悲しそうにしている
- 28 笑顔が少ない
- 29 年齢相応に顔つきが少ない
- 30 涙りついた日あるいはほうつらな目をしている
- 31 目を合わせて笑いあうことが少ない
- 32 自分から甘えてくることが少ない
- 33 甘え方が下手である
- 34 次々に別の大人を求めろ
- 35 抱擁を食わせることが少ない
- 36 大人がいても自分で危険な行動をとる
- 37 ちょっとしたことでも固まってしまう
- 38 「特別な大人」を求めてくるがすぐに飽く
- 39 「特別な大人」を求めていながら、ちょっとした事で避けてしまふ
- 40 ひとりの大人と集中して遊べない
- 41 特定の大人との無いかかわりができない

目 感覚・行動・調整

- 1 驚つきが多い
- 2 エリアや食事の区や境界に上手がある
- 3 感情が激しい物と厚い（おとなしい）物があり、一言しない
- 4 興奮するところから逃げることが出来ない
- 5 驚かす人になると過剰以上に悲しく泣く
- 6 泣き出すとなかなか止まらなない
- 7 ぐずることが多い
- 8 かんしゃくが多い
- 9 かんたんなると暴力的になる
- 10 一つの行動から他の行動への切り替えがうまくいかない
- 11 大きな音を嫌がる
- 12 大きな声で話す傾向がある
- 13 理解などを知識に換がる
- 14 遊びやすい
- 15 不要な場を往復
- 16 ボール投げが年齢相応に出ない
- 17 危険を察せず、高いところによつたり、飛び降りたりする
- 18 すぐに楽しい遊び場になる
- 19 他人をもののように扱う
- 20 その場にあったことと行動が一致していない
- 21 異物にやぶさしい
- 22 ルールが守れない
- 23 よくけんかをする
- 24 しのぎを削る

- 25 友だちに暴力を振るう
- 26 人のしものをとって自分のテリトリーにためておく
- 27 小さい子に暴力を振るう
- 28 大人の言うことにことごとく反抗する
- 29 絵の子をいじる
- 30 力の強い子に支配されやすい
- 31 記憶力が良い
- 32 力の強い人と弱い人に対する態度が大きく違う
- 33 年齢不詳に性的な言葉を発する
- 34 強い言葉を多用する
- 35 しののけいが見物である
- 36 非常に肉体的な行動をする
- 37 ストリーのある遊びができる
- 38 集中力がない
- 39 遊びが次々に変わる
- 40 友達に簡単に手が出る
- 41 まよごとを利用することができる

IV . 解 離 症 状

- 1 ぼろっとしたり、意識がうつろになっている
- 2 時間の感覚に乏しい
- 3 狂言を通して学ぶことに困難がある
- 4 道ちを認めなかったり、嘘をつきつづける

平成 15 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

「児童福祉機関における思春期児童等に対する心理的アセスメントの導入に関する研究」（主任研究者：西澤哲）

分担研究(Ⅲ)報告書

児童養護施設におけるアセスメントのあり方に関する研究

分担研究者 西澤哲 大阪大学大学院人間科学研究科

【研究要旨】児童養護施設に入所中の子ども 2,000 人を対象とした調査で、児童養護施設の子どものための施設入所以前の虐待経験を評価するための「虐待経験尺度」(Abuse Experience Inventory: AEI)と、虐待経験の影響を把握するための「虐待を受けた子どもの行動チェックリスト」(Abused Child's Behavior Checklist: ACBL)の尺度構成作業を行い、統計学的な信頼性および妥当性を備えた尺度を開発した。

この両尺度を用いて児童養護施設に入所中の子どもの虐待経験および行動特徴を分析することで、虐待体験の深刻さが行動上の問題の重度性に関連していることが明らかとなった。

また、虐待を受け施設で生活している子ども一事例に関して、AEI と ACBL を中心としたアセスメントを実施し、その臨床的な有用性が確認された。

(研究協力者) 50 音順

尾崎仁美 京都ノートルダム女子大学

沼谷直子 大阪大学大学院

藤澤陽子 児童養護施設暁学園

松原秀子 大阪大学大学院

山本知加 大阪大学大学院

検査や、一時保護所で実施されている行動観察では、虐待等のトラウマ性の体験に起因する子どもの心理的問題や行動上の問題を十分に把握できるとは言い難い。子どもの個々のニーズに応じた個別的なケアを実現するためには、まず、こうした問題の客観的なアセスメントが必須要件となる。

そこで、研究 1 では、子どもの虐待経験やそれに起因すると考えられる心理的、および行動上の問題の評価を目的とした尺度等の開発を試みる。本尺度の目的は、(i)子どもが虐待を受けたかどうかの判断基準を示し、(ii)子どもが主としてどのようなタイプの虐待を受けてきたかを評価し、また、(iii)その虐待の程度の客観的な指標を提示することである。

次いで、研究 2 では、従来の臨床的な検討をベースとして、虐待を受けた子どもの行動特徴を客観的に評価するための尺度の構成を試みる。従来、CBCL(Child Behavior Checklist: 子どもの行動チェックリスト)など一般的な行動観察チェックリストにより虐待を受けた子どもの行動を評価しようとする試みはなされているものの、虐待の影響に特化した尺度は存在せず、虐待の影響を的確に把握するためには、こうした尺

A. 研究目的

近年、児童養護施設等の児童福祉施設は虐待を受け家族の元から分離された子どもの社会的受け皿としての機能を果たすようになった。こうした子どもたちへのケアに関しては、従来のような「集団主義養護」や「管理的養護」では不適切であり、小集団を対象とした個々の子どものニーズに見合った個別的ケアの必要性が指摘されている(厚生労働省社会保障審議会児童福祉部会、2003)。

そこで問題となるのが、子どもの心理的な状態のアセスメントの方法である。現在、虐待を受けた子どもが心理的な問題や行動上の問題を呈しやすいたことは臨床経験的には明らかであるものの、それを客観的に評価する方法は存在しない。児童相談所で行なわれる心理診断に用いられる既存の心理

度の開発はきわめて重要である。

研究3では、研究1, 2で開発した二つ尺度を用いて、虐待を受け施設で生活している子どもの評価を行い、虐待の程度と行動上の問題の関係を検討する。この研究は、今後の研究の展開のための予備的研究としての位置づけを有する。

さらに、研究4では、AEIおよびACBLを用いたアセスメントに関する事例研究を行う。アセスメントの目的のひとつには、子どものケアや治療の効果を客観的に評価することが含まれる。そこで、ある事例について一定時間をおいて再評価を行うことで、両尺度が子どもの行動上の変化をとらえることができるかを実践的に検討する。

B. 研究方法

【研究1】「虐待経験尺度」(Abuse Experience Inventory : AEI)の開発に関する研究

筆者らのこれまでの臨床経験から、子どもが経験することが多い虐待行為を記述した項目を、身体的虐待(6項目)、ネグレクト(7項目)、心理的虐待(7項目)、および性的虐待(9項目)の四分類についてリストアップした。さらに、虐待の新たなサブタイプとして指摘されるDV(いわゆる配偶者間暴力)の目撃体験に関する5項目を追加し、計34項目からなる尺度を構成した。

調査用紙を、アトランダムに抽出した100箇所の児童養護施設に送付し、一施設あたり20名の子どもについて、子どものケアを担当しているケアワーカーに子どもの状況等を記入してもらった。虐待を受けたと施設が認識している子ども10名と、これまでの情報により虐待は受けていないと考えられている子ども10名を選んでもらうこと、および子どもの年齢に偏りが生じないことを条件に、調査対象となる子どもの選定は施設に一任した。調査票の配布は全国養護施設協議会を通じて行い、合計1,400票の調査票が回収できた。

子どもの性別は男の子705人、女の子694人(未記入1人)であり、年齢範囲は2~20歳、平均10.6歳であった。

なお、研究1の有効回答数は1129票であった。

【研究2】「虐待を受けた子どものチェックリスト」(Abused Child's Behavior Checklist : ACBL)の開発に関する研究

ACBLの開発に当たって、これまでの臨床経験に基づき、虐待の影響によって生じると考えられる子どもの特徴的行動を検討し、14の臨床尺度、70項目からなるチェックリストを作成した。このチェックリストを、今回研究対象となった1,400人の子どもたちを担当するケアワーカーに配布し、「よくある」から「ほとんどない」の4件法で回答してもらった。

また、チェックリストの妥当性の検討のため、従来のCBCLを用いたWolfeら(1989)や坪井(未発表)の研究で、虐待の有無によって有意差があるとされている33項目を抽出してCBCL虐待関連尺度を構成し、それぞれの子どものについて担当ケアワーカーに記入してもらった。

研究2の有効回答数は、1,190票であった。

【研究3】虐待経験と行動上の問題の関連に関する研究

研究3では、今回の調査によって得られたデータを分析することで、子どもたちが受けてきた虐待の程度やタイプと、子どもの呈する行動上の問題との関連を検討した。

今回は児童養護施設に入所中の子どもについてのみ調査を行ったが、今後は、さまざまな機関や施設でケアされている子どもたちを対象を広げ、さまざまなタイプおよび程度の虐待を経験した子どもの行動のアセスメントを担えるように尺度を改良する必要がある。本研究はそうした目的のための予備的研究としての意味を持つ。

【研究4】アセスメントの有用性に関する事例研究

研究4の事例研究では、虐待を主訴に児童養護施設に入所したある男の子について、入所1年後に行った初回アセスメント(AEI, ACBL, TSCC¹およびCSBI²を使用)と、半

¹TSCC(Trauma Symptom Checklist for Children, Briere, 1996)は、慢性的トラウマ体験に起因する心理・精神症状の自記式質問紙として欧米で信頼性および妥当性が確認されている。西澤ら(1999)は、その出版元である米国フロリダ州の

年間のプレイセラピーの後の再アセスメントの結果を比較することで、子どものケアにおけるアセスメントの有用性を検討した。(倫理面への配慮)

データの収集にあたっては、個別情報の追跡が行えない形で管理簿を作成した。

AEI および ACBL の記入は、担当ケアワーカーのみの判断で行ってもらった。

また、研究 4 の事例研究では、ケースの使用に関する同意を児童養護施設の管理責任者から得、またケースの同定が可能となる情報は一切削除した。

C. 研究結果

【研究 1】「虐待経験尺度」(AEI)の開発に関する研究

1. 尺度項目の確定

児童相談所の児童票および施設職員の認識による虐待体験の有無の別で T 検定を行ったところ、AEI 全 34 項目に有意差($p < .01$)が確認された。次に、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を繰り返し、因子負荷量等を検討した結果、「心理的虐待」、「ネグレクト」、「身体的虐待」、「性的虐待」および「DV の目撃体験」の 5 因子尺度、30 項目からなる虐待経験尺度を確定した(Table 1)。

2. 信頼性および妥当性の検討

因子分析で得られた AEI の下位尺度の因子間相関および信頼性係数を示す(Table 2, 3)。

因子間相関では、特に「心理的虐待」と他の 4 タイプとの相関、および「ネグレクト」と「DV の目撃」との間に高い相関が認められ、心理的虐待が他のタイプの虐待と合併して発生する可能性が高いこと、および DV とネグレクトとが合併しやすいことが示唆された。

一方で、ネグレクトと身体的虐待および性的虐待、身体的虐待と性的虐待の相関はやや低かった。ネグレクトは、親から子

もへのエネルギーのベクトルという点で他の虐待とは異なっており、その心理力動に違いがあるのではないかと考えられているが、今回の結果はこのネグレクトの特殊性を反映している可能性があると思われた。

各下位尺度の Cronbach の α 係数は、Table 3 に示したとおりである。性的虐待および DV の目撃でやや低い数値とはなっているものの、全体的には信頼性が確認されたと言える。

また、全 34 項目に関して、虐待経験の「あり」、「なし」についての施設職員の認識の別で T 検定を行い、1%水準で有意差が見られなかった項目は削除するという手続きをとったため、本尺度の妥当性は確認されていると言える。

本研究の結果、十分な信頼性と妥当性を備えた、子どもの虐待体験の種別とその程度を評価するための尺度が得られた。

【研究 2】「虐待を受けた子どものチェックリスト」(ACBL)の開発に関する研究

1. 因子分析

対象群を 4 つの年齢層 (5 歳以下、6~9 歳、10~12 歳、13 歳以上) に分類し、それぞれの年齢層ごとに ACBL の得点に虐待経験の有無による影響が見られたかどうかを検討した。その結果、5 歳以下の子どもたちでは、虐待群と非虐待群の間に得点の有意な差が見られる項目が少なかった。これは、ACBL が測ろうとしている虐待経験に起因する行動特徴が、5 歳以下の発達段階では虐待経験のない子どもであっても一般的に現れやすい行動であることによるものであろうと判断した。そこで、今回考案中の ACBL が、5 歳以下の子どもたちの行動特徴を評価する質問紙としては適当でないと判断し、以降の分析では 5 歳以下の子どもを除外することとした。

ACBL 全 70 項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、解釈可能性から 8 因子を採択した。負荷量が .30 以下の項目および負荷量が複数の項目にわたって高くなっている項目を削除しながら因子分析を繰り返した。

上記の手続きで得られたそれぞれの因子について、因子負荷量の高いものから 1 因子あたり、4~5 項目を抽出し、8 因子、38

Psychological Assessment Resource 社から、調査目的に限って使用してよいとの許可を得て、日本語版 TSCC を作成している。

² CSBI(Child Sexual Behavior Inventory)は、Friedrich(1992)が作成した子どもの性行動を評価するためのチェックリストであり、性的虐待の影響の評価に使用されている。今回の研究のため、Friedrich の許可を得て日本語訳版を作成した。

項目からなる行動チェックリストが得られた(Table 4).

第1因子は、「大暴れをして物を壊したり、人に殴りかかったりするなどいわゆる『パニック状態』になる」、「怒りを持つと大暴れをする」などの項目から成っており、『感情コントロールの障害』とした。

第2因子は、「注意の集中ができない」、「多動でじっとしていることができない」などの項目から成っており、『注意・多動の問題』とした。

第3因子は、「年少の子どもを使い走りにつかう」、「職員が見ていないところで弱いものをいじめる」、「ほかの子をそそのかして悪いことをさせる」などの項目から構成されており、『力の論理』とした。

第4因子は、「生活全般に意欲がない」、「『どうせ自分なんか・・・』などと自己卑下したようなことを言う」などから構成されており、『意欲低下・自己イメージの問題』と命名した。

第5因子は、「感情が表情に表れない」、「表情の変化がすくない」といった項目から構成されており、『感情の抑圧』と名づけた。

第6因子は、「年齢に比べて性的な事柄に対する関心が強い」、「ほかの子と性的な遊びをする」、「この子が身体接触を求めるとき、どこか『性的ニュアンス』を感じる」などから成っており、『性化行動』と命名した。

第7因子は、「趣味や勉強で、得意な分野や自信を持っている事柄がある」、「一般的に自信がある」から成っており、『意欲・自信の欠如』(すべて逆転項目)とした。

第8因子は、「職員の中で、この子が一緒にいたがる特定の職員がいる」、「職員の中で、この子が特に好んでいる職員がいる」、「困ったことや心配事があると、周囲に助けを求める」などの項目から構成されており、『他者への不信感』(すべて逆転項目)と名づけた。

2. 信頼性および妥当性の検討

ACBLの質問紙としての信頼性を検討するため、各尺度の信頼性係数を見た。Table 5に示したように、8尺度中5尺度が.80以上という高い値を示し、また、残りの3尺度も.70以上であった。この結果から、ACBL

の全般的信頼性は高いと言える。

次に、ACBL尺度の妥当性を検討するため、ACBL下位尺度間の相関分析、CBCL虐待関連尺度との相関分析、および虐待経験の有無のよる分析を行った。

ACBLの下位尺度間には、高い有意相関が見られた(Table 6)。ただし、第7尺度(意欲・自信の欠如)および第8尺度(他者への不信感)と、他の5つの下位尺度との間には、負の有意相関や無相関が見られる傾向があった。

ACBL尺度全項目とCBCL尺度とは高い有意相関($r=0.609$; 1%有意)が得られた。また、第7尺度と第8尺度を除くACBLの各下位尺度との間にも概ね高い正の有意相関が認められた。

子どもを、施設職員が認識している虐待経験の有無によって「虐待あり群」(589名)、「虐待なし群」(601名)に分け、2群のACBLの得点を比較した。その結果、第8尺度を除く全ての下位尺度において虐待なし群が有意に高い得点($p<.01$)であることがわかった。

以上の分析より、ACBL尺度の全般的な基準関連妥当性および構成概念妥当性が示されたと言える。ただし、第7および第8尺度は妥当性について問題があると考えられた。これは、この両尺度に含まれる項目がすべて逆転項目として設定されており、かつ、読みようによっては肯定的にも否定的にもとれる曖昧な項目が多かったことが影響していると考えられた。今後、修正する必要がある。

【研究3】虐待経験と行動上の問題の関連に関する研究

1. 児童養護施設に入所している子どもの虐待体験

現在、児童養護施設で生活している子どもがどのような虐待を経験してきたかを見るため、AEIの特徴を分析した。

まず、回答のあった1,129人の子どものAEIについて、項目へのチェックがいずれか一つのタイプの虐待のみになされているものを「単独虐待群」、複数のタイプにわたっているものを「重複虐待群」、そしてまったくチェックのないものを「非虐待群」としたところ、虐待経験のある子ども890人

の72.5%(645人)が「重複虐待群」となり(Table 7)、施設で生活している子どもの多くが、複数のタイプの虐待を経験していることがわかった。

そのため、AELのチェック項目を単純に検討するだけでは、子どもたちの虐待体験の特徴を明らかにすることができないと判断し、AEIの5つの下位尺度得点を標準化したものをK-Means法によって類型化したところ、7つのクラスターが抽出された。この7つとは、「心理的虐待群」(PsA群:心理的虐待得点が高く、また、身体的虐待の得点もやや高い)、「ネグレクト群」(NG群:ネグレクト得点のみが高く、他の尺度得点は全体的に低い)、「重複虐待群」(MA群:各尺度得点が全般的に高い。特にネグレクト尺度の得点はネグレクト群と同程度に高い)、「DVの目撃群」(DV群:DVの目撃尺度得点のみが高く、他の尺度得点は全体的に低い)、「性的虐待群」(SA群:性的虐待尺度の得点が高群よりも高く、また、ネグレクト得点もやや高い)、「身体的虐待群」(PhA群:身体的虐待尺度の得点のみが高い)および「非虐待群」(NA群:各尺度の得点が全体的に低い)であった。非虐待群(658人、クラスター分析による群化であるため、前項の「非虐待群」とは一致しない)を除く471名6群の内訳を見たところ(Table 8)、NG群がもっとも多く(30.8%)、次いでDV群(22.3%)が多いことがわかった。全国の児童相談所の相談処理件数の統計では、虐待に占めるネグレクトの割合はそう高くないが、施設で生活している子どもの実態からすれば、ネグレクトがもっとも多いと言える。また、DVの目撃体験は、現在の児童虐待防止法では虐待との分類はなされていないが、児童養護施設に入所している子どもの多くが、そうした体験をしてきていることがわかった。

2. 虐待を受けて施設に入所している子どもの心理、行動上の問題

異なったタイプの虐待を重複して経験することが問題行動に影響を与えるかを検討するため、研究3の1で用いた「非虐待群」、「単独虐待群」、「重複虐待群」の別でACBL得点を比較した(Table 9)。

その結果、「他者への不信任」を除く全下位尺度において、1%水準の有意差が得られ

た。多重比較の結果から、非虐待群と単独虐待群の間には各下位尺度得点の差は見られず、非虐待群および単独虐待群と重複虐待群の間に有意な得点差が見られることがわかった。この結果は、子どもが示す問題行動には虐待経験の累積効果が見られることを示唆していると考えられる。

次に、経験した虐待のタイプによって行動上の影響に違いがあるかを検討するため、AEIのクラスター分析で得られた各群ごとにACBLの特徴を見た。その結果、第7尺度(意欲・自信の欠如)以外のすべての下位尺度で有意差が見られた(Table 10)。

有意差が見られた7つの尺度のうち、第8尺度(他者への不信任)を除く6尺度で、虐待のタイプと問題行動の関係に一定のパターンが見られた。全体的には、SA群、MA群、PsA群の下位尺度得点が高く、NA群とNG群の得点が最も低く、PhA群およびDV群がその中間に位置するという傾向であった。

各群の特徴を見ると、全体的には低得点であったNG群が第4尺度(意欲低下・自己イメージの問題)に関しては中程度の得点を、全体的には中程度の得点であったDV群が第5尺度(感情の抑圧)では高い得点を示していた。また、性化行動はSA群に特化した問題であることが示唆された。

【研究4】アセスメントの有用性に関する事例研究

児童養護施設暁学園
藤澤陽子

1. 事例概要

(入所理由)母の家出と親族からの虐待。
(事例経過)「6歳の男の子Aくんが同居中の男性親族に暴力を受けて顔面に痣がある」と保育所から児童相談所への通告があった。調査の結果、Aくんへの身体的虐待と夫婦間のDVの存在が明らかとなる。Aくんは一時保護を経て児童養護施設への入所となった。
(施設入所後のAくんの様子)毎日のように夜尿、遺尿がある。行動面では、年少の子に対して威圧的な態度を取ったり、突然暴力を振るう、叱責に対してニヤニヤと笑っているなどの特徴が観察された。トイレに

物を詰めて遊ぶこともあった。

2. プレイセラピーの経過概要

初回は、シルバニアハウスを使った遊びが中心である。子どもを階段から落として殺してしまう、地震が起きて家は全壊、爆発するなど、激しい内容である。

以降も、初回と同様のテーマが繰り返される。子どもが怪我をしたり瀕死の状態になるが、見ている子どもたちは笑っているという表現が現れる。

冷凍庫で凍らされた子ども「幽霊くん」が登場する。「幽霊くん」は家や救急車を乗っ取り大暴れするが、その存在は誰にも気付かれていないとのことであった。

「幽霊くん」はお父さんに包丁で刺されて死んだというエピソードが登場。Aくんは「お母さんが死んだのは幽霊くんのせいだ」と父親に責められたと話す。「幽霊くん」が入院となり、セラピストが治療を担当。数回後のセッションで「幽霊くん」は退院し、家に帰る。幽霊くんの両親が登場し、3人で一緒に寝る。

以降のセッションで、「幽霊くん」が再び怪我をして入院する。入院後、生まれたばかりの「バブちゃん」に変化する。「バブちゃん」は、地震が起きて頭に怪我をする。

「(地震時に)お母さんがいたけど、寝ていて気付かなかった」と言う。

3. アセスメントの概要

(1)AEI

得点のプロフィールは、身体的虐待尺度が最高値であり、DVの目撃尺度得点も高いものであった。また、心理的虐待尺度得点もやや高かった。性的虐待尺度得点は0点であった。

この結果から、Aが深刻な身体的虐待を受けてきており、また、DVの目撃体験もあると考えられた。

(2)ACBL

初回のアセスメントでは、「感情コントロールの障害」および「性化行動」の尺度の得点が高くなっていた。

6ヶ月のプレイセラピー後の再アセスメントでは、各尺度において、初回の結果と比較して全体的に得点が上昇していた。

(3)CSBI(子どもの性的行動チェックリスト)

初回のアセスメントでは1点、再アセス

メントでは、「他の子どもに自分の性的部位を見せる」、「嫌がっているのに他の子どもの衣服を脱がす」などの行為が見られるようになったため、4点に上昇した。

(4)TSCC(子ども用トラウマ症状チェックリスト)

初回ではPTS尺度得点のみが準臨床域にあり、PTSD性の侵入症状を経験している可能性があると考えられた。

再アセスメントでは、不安尺度、怒りの尺度、および顕在的解離尺度の3つの得点が高くなり、臨床域となる。不安障害、解離性障害、および反応性の怒りが、臨床的な介入を必要とする程度、認められる可能性があることがわかった。

4. アセスメントの結果に関する考察

Aくんは、AEI得点に示されているように重複した虐待を受けており、TSCCによりトラウマ性の精神症状が認められた。ACBLの項目は、感情コントロールの障害と性化行動の問題を示唆しており、これらの問題は身体的虐待およびDVの目撃体験に起因している可能性があると考えられた。

6ヶ月間のプレイセラピーの後、TSCC得点は総じて高得点化している。これはセラピーの経過で過去の虐待的体験や養育環境が意識化されたためだと考えられる。

TSCCの反応性怒り尺度得点の上昇に比例して、ACBLの感情コントロールの障害の得点も高くなっていることは、ACBLが虐待のもたらす心理的影響および行動的影響を捉える尺度として有用であることを示唆している。

CSBI得点は、性虐待を疑うほど高い得点ではなかったが(Friedrichは、カットオフポイントを11点と12点の間において)、何らかの性的刺激を受けている可能性はあると考えられた。Aが、DVの目撃を経験していることを考えるなら、DVにともなう性的な関係に曝露されている可能性も考えられよう。

本ケースのように、AEIにおける性的虐待の得点が低くてもCSBIの得点が高い場合には、不適切な性的刺激への曝露が影響している可能性を検討する必要であろう。また、CSBIの高得点化と比例してACBLの性化行動得点も高くなっており、ACBL

が何らかの不適切な性的刺激への曝露を示唆する尺度として有用であることを示していると言える。

D. 考察

1. 本研究で、子どもの虐待経験の程度を客観的に評価するための「虐待経験評価尺度」(Abuse Experience Inventory : AEI) が得られた。この尺度を用いることによって、子どもの虐待の程度を、身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待、性的虐待、および DV の目撃体験の別に得点によって評価することが可能となった。

今後は一般群を対象とした調査を行うことで子どもたちの一般的な虐待体験の程度の把握、何らかの介入・援助が必要とされる基準の策定などを行っていく必要がある。

2. 本研究で、「虐待を受けた子どもの行動チェックリスト」(Abused Child's Behavior Checklist : ACBL) が得られた。本チェックリストは、子どもの行動を、「感情コントロールの障害」、「注意・多動の問題」、「力の論理」、「意欲低下・自己イメージの問題」、「感情の抑圧」、「性化行動」、「意欲・自身の欠如」、および「他者への信頼感」の8つの尺度に分けて評価するものとなっている。

従来、臨床的な研究において虐待が及ぼす子どもの行動や心理への影響が指摘されてきているが(たとえば西澤(1999)など)、今回の研究結果は、そうした臨床研究に実証的なデータの裏づけを与えたと言える。

今後、ACBL を使用することによって、子どもの問題行動をタイプ別に客観的に評価することができるようになり、治療やケアの必要性の把握やそれらの効果の測定が可能となる。

ただし、本研究で得られた ACBL には、第7尺度および第8尺度の妥当性に問題点があった。これは、質問項目の両義性や曖昧さによるものと考えられ、今後の改定が必要である。

また、今回は児童養護施設で生活している子どものみを対象として研究を行ったが、今後、情緒障害児短期治療施設や医療機関などにいる子どもに対象を広げ、より高度な援助を受けている子どもたちのデータを得ることによって、行動評価尺度としての ACBL の精度を高めていくことが可能とな

ろう。

3. 今回得られた AEI を用いて、虐待を受け児童養護施設で生活している子どもの虐待体験の評価を行ったところ、多くの子どもが、複数のタイプの虐待を重複して受けてきていることがわかった。子どもたちは、さまざまなタイプの虐待を重ねて経験することで、複雑な心理的状态に至っている可能性が示唆された。また、従来、子どもの虐待体験を、身体的虐待やネグレクトなど、その主たるタイプで分類しているが、子どもの置かれた状況を理解する上では、これらの分類は適切ではないと言えよう。

また、クラスタ分析の結果から、虐待を受け施設で生活している子どものなかでは、ネグレクトを経験した子どもの割合が最も多いことがわかった。児童相談所の統計では、虐待の相談処理件数中もっとも多いのは身体的虐待であり、ネグレクトがそれに次いでいる状況である。この数字の違いを、「相談処理件数では身体的虐待の数が多いものの、施設への入所に関してはネグレクトが多くなることによる」と説明するのは不自然である。むしろ、児童相談所や施設にネグレクトに対する過小評価の傾向があり、それがこの結果につながったと考えるべきだろう。いずれにせよ、施設養育にとっては、ネグレクトを受けた子どものケアが問題となると言えよう。また、性的虐待を経験している子どもが10%程度いたことにも注目すべきである。さまざまな虐待のなかでも、性的虐待が子どもの行動や心理にもっとも深刻な影響を生じる可能性があると考えられていることを考えるなら、施設における子どものケアを考える上で、性的虐待の問題は非常に重要な意味を持つと言える。

4. 今回得られた ACBL を用いて、施設で生活する子どもの行動上の問題の評価を試みた。その結果、虐待の経験と ACBL が測定する問題行動群には関係があることが示された。

一般的に言って、虐待の経験が深刻であるほど、子どもの示す問題行動はより大きくなることが明らかとなった。

また、経験した虐待のタイプと行動上の問題の関係を見たところ、性的虐待、心理的虐待、およびさまざまなタイプの虐待を

重複して経験してきた子どもたちがより深刻な行動上の問題を呈する傾向があることがわかった。従来、子どもの頃に性的虐待を経験した人(いわゆるサバイバー)を対象とした研究では、その深刻な精神的影響が指摘されてきたが(たとえば、齋藤ら, 2003 など)、今回の結果は深刻な影響がすでに子どもの頃から存在している可能性があることを示唆している。また、性的虐待に特化した問題として性化行動が見られることが実証的に確かめられた。心理的虐待は、これまでの研究でもその影響の深刻さが指摘されており(西澤ら, 1999)、今回の研究もそれを実証する結果となった。心理的虐待の子どもへの影響の深刻さの背景には、亀岡(1997)が指摘するように、親の子どもに対する「心理的加虐性」という要因が存在している可能性があると考えられる。

今回の研究で、児童養護施設が、これら虐待の影響によるさまざまな行動上の問題を抱えた子どものケアに当たっているとの実態が明らかとなった。今後、こうした問題行動への適切なケアのあり方をめぐる議論が必要となろう。

5. 福祉臨床の現場でのアセスメントのあり方を実践的に検討することを目的とした事例研究では、初回のアセスメントの結果と、6ヶ月のプレイセラピーをはさんでの再アセスメントの結果で、ACBLが測定する問題行動が悪化しているという結果となった。同時に実施したTSCCのスコアも同様に心理的問題の重度化を示していることから、この結果が、ACBLの尺度としての妥当性の問題の表れであるという説明は排除できると考えられる。おそらく、施設のケアやプレイセラピーによる虐待体験への直面化が精神的な不安定さにつながり、それが問題行動の一時的悪化という現象をもたらしたとの説明が妥当であろう。このように、子どものケアや治療の実施に際して、心理的、行動的なアセスメントを行うことで、ケアや治療の効果を評価することができ、その評価の結果にもとづいてケアや治療のプランを立て直すといったことが可能となろう。

E. 結論

十分な信頼性および妥当性を備え、かつ

福祉現場での実践的使用に耐えうる「虐待経験評価尺度」および「虐待を受けた子どもの行動チェックリスト」が開発された。

今後、これらの尺度を用いることで、子どもの虐待経験や虐待の影響に起因する行動上の問題を客観的に評価することができるようになり、たとえば、子どもへのケアや治療のプラン策定のための資料の提供や、それらの効果測定が可能となった。

今後の課題としては、項目の精査による尺度の妥当性の改善、一般群や医療群等のデータの収集による標準化の試みがあげられる。

F. 研究発表

Nishizawa, S. Childhood Trauma in Japan. 2003年度大阪教育大学学校危機管理センター国際シンポジウム, 2004.

《参考文献》

- Briere, J.: Trauma Symptom Checklist for Children, PAR, 1996.
- Friedrich, W.N. et al. Child Sexual Behavior Inventory: Normative and Clinical Contrasts. Psychological Assessment, 4, 303-311, 1992.
- 亀岡智美. 被虐待児の精神医学. 臨床精神医学, 26(11), 11-17. 1997
- 厚生労働省社会保障審議会児童部会. 「児童養護のあり方に関する専門委員会」報告書. 2003.
- 西澤哲, 中島健一, 三浦恭子, 養護施設に入所中の子どものトラウマに関する研究: 虐待体験とTSCCによるトラウマ反応の測定. 日本社会事業大学社会事業研究所, 1999.
- 斎藤学, 中村俊規, 沼田真一. 近親姦虐待と成人期精神障害. 子どもの虐待とネグレクト. 5(2), 330-341, 2003.
- 坪井裕子. Child Behavior Checklist /4-18 (CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴: 児童養護施設における調査の検討. 未発表.
- Wolfe, V. V., Gentile, C & Wolfe, D. A. The Impact of Sexual Abuse on Children: A PTSD Formulation. Behavior Therapy, 20, 215-228, 1989.